

【海外研究動向の紹介】

スコットランドの聾者社会における ストーリーテリングの研究

鵜野 祐介

ことがきっかけで、聾者の社会や文化に関心を持つようになったこと、手話で行うストーリーテリングの「語り手」の存在を知ると同時に、手話という言語文化がこれまで民俗学研究の対象からは除外されてきたことを知り本格的な調査研究に取り組むようになったこと……、そうした話を、発表の時と同様、表情豊かに詳しく語って下さった。そして、今回の発表を日本に紹介させてほしいという筆者の依頼をご快諾下さった。

——二〇一六年七月一日三日、英国スコットランドのアバディーン大学で開催された「民俗学・民族学・民族音楽学二〇一六年度研究大会 [Folklore, Ethnology, and Ethnomusicology Conference, Aberdeen 2016]」に参加し、数日前に博士号を受理したばかりというエディンバラ大学大学院生エラ・リース [Ella Leith] さんの研究発表を聴く機会を得た。タイトルは「聴くことの喪失——聾者の世界における非聾者フィールドワーカー——[On losing my 'Hearing': A Non-Deaf Fieldworker in the Deafworld]」で、「口承文芸＝音声言語によって伝達された文芸」という既成概念を打ち砕く斬新な内容と、聾者の世界に飛び込んでフィールドワークを行なった真摯な研究姿勢、そして身ぶり手ぶりを交えた豊かな表現力によって、筆者を含めた全ての聴衆を魅了した。学会の発表を聴いて涙が止まらなかったのは初めての経験だった。

発表の後、リースさんに話を伺った。自分の家族や知り合いに聾者はいなかったこと、たまたま大学で聾者の友人を持った

八月末に帰国し、本研究の内容に最もふさわしい発表媒体として、本誌「口承文芸研究」への寄稿を思い立ち、機関誌委員会にご相談した結果、七月の研究発表の内容だけでなく、その基となった博士論文「スコットランドの身体的・口頭的伝承における、言葉を超える身体の動き——英国手話ストーリーテリングと〈聾者社会の声〉との出会い」[Moving beyond words in Scotland's corporeal traditions: British Sign Language storytelling meets the 'Deaf Public Voice'] の概要も含めて、海外における研究動向の紹介という形で掲載させていただけることになった。

筆者の乏しい英語読解力で本研究の要諦を的確に把握できるかどうか甚だ心許ない限りだが、微力を尽くしたい。いつかの博士論文が加筆修正されて単行本として刊行され、さらに日本語訳版が出版される日を夢見ている。そして拙稿が、この夢の実現にとつてのステップボードになればと密かに期している。

一、見過ごされてきた聾者の言語文化

スコットランドの豊かな口頭伝承 [oral traditions] は一八世紀以降ずっと学術的な関心を集めてきた。そして今日においても、西洋社会における最も豊かな民間伝承や民謡の遺産 [legacy] を持つ国として国際的に認知されている。ところが、「口の言葉」 [word of mouth] によって伝えられた言語文化の収集と研究は膨大な量に及んでいるにもかかわらず、「手の信号」 [sign of hand] によって伝えられたスコットランドの聾者社会の伝統的な言語文化については、それが「口頭伝承」や「触ることのできない（無形）文化財」 [intangible cultural heritage] といった概念の中に含まれていなかったためか、見過ごされてきた。

本研究は、この看過に着目し、これまで忘れられていた「自生種の」 [autochthonous] 言語である「英国手話言語」 [British Sign Language (BSL)] によって創作され演じられてきたスコットランドの伝統的な手話言語文化について考察するとともに、手話言語を主要なコミュニケーション・ツールとして生活する人びと＝聾者によって構成されている、いわゆる「手話社会」について考察するものである。

二、手話言語文化が見過ごされてきた二つの理由

BSLや手話社会がこれまでスコットランドの伝承文化研究において見過ごされてきた理由として、二つの点が考えられる。第一に、手話社会は公衆の目に触れにくい。そのため「聾者」とは聞くという能力を持たない者すなわち「能力欠如者」 [disability] と判断されてきた。ところが実際には、「聾者」の大多数はわずかながらでも聴力を持っており、音声言語によるコミュニケーションは不可能というわけではないにもかかわらず、手話を用いることを選択しているのである。それは手話という言語が、音声言語にはない一定の特長すなわち手話言語特有の文化的価値を有しているからに他ならない。にもかかわらず、聾者や手話社会の実態に対する無知と無関心によって、「健常者」よりも聞くという能力において劣る聾者が必要に迫られてやむなく用いている手話言語には、研究対象としての文化的価値はないとの判断が、伝承文化の研究の中で無意識裡になされてきたのである。

第二に、「口頭伝承とは何か」という問いにおいて想定されている「言語」の概念から、手話が除外されてきたことが挙げられる。言うまでもなく、圧倒的多数の人びとが「話す・聞く世界」 [the speaking-hearing world] の住人であるが故に、「言語」という概念も「話す・聞く」行為において用いられるものによっ

て規定しようとする。そしてそのことに對して何の疑問も持たない。言語学者とて同じである。手話という視覚的言語によって成立する「聾者の世界」[the Deafworld] または「聾者空間」[Deafspace]」とも呼ばれる世界、すなわち音声言語によって成立する「話す・聞く世界」とは異なる、もう一つの世界があることに気づかないまま……。

本格的な手話言語 [sign languages] の研究は、アメリカで始められた。例えばストーカー (Stokoe, 1960) のように、話すことと「speech」に比べて手話の方が複雑な内容をきちんと伝えられるツールとしてより優れていることを証明しようとした研究もある。だが、そうした努力にも拘らず今日も尚、手話言語は「本物の言語」ではないとか、「話すことに比べて複雑な内容を伝えることができない言語」だと一般的に見なされている。

また従来、口頭伝承 [oral traditions] が「口の言葉」[words of mouth]」によって伝えられてきたものと定義されることにより、「肺から放出される空気によって運ばれる言葉の流れ」や「口と耳によって形づくられる、触れることのできない文化財」にのみ焦点が当てられ、「手によって形づくられる」言葉はないがしろにされてきた。けれども「口頭伝承」において重要なのは、伝達に用いられるツールの形状や様態ではなく、個人と個人を直接的につなぐという伝達の有り様なのである。したがって、「口頭伝承」の概念はより広い意味において捉え直される必要があり、「語りや唄による口頭伝承」と並んで、「手話による口頭

伝承」が重要な位置を占めていることを理解すべきなのである。

三、身体的・口頭的伝承

ところで実は、「語る」という行為においても、ジェスチャーや顔の表情をはじめとする「音声」以外の媒体によって多くの意味内容が伝達されている。また、身体運動と連動することによって唄の詞章が伝達され記憶されるという具体例を、オービー夫妻 [Iona & Peter Opie] が収集した子どもの手合せ遊び [clapping games] の中に、またゲール語 (Gaelic)・スコットランドのケルト系言語〔筆者注〕の縮充唄 [waulking songs] や伝統的な演劇・舞踊、楽器演奏技術の伝承や伝達においても認めることができる。つまり、これらは全て、何よりもまず身体運動や模倣を通して人から人へと伝達された伝承芸術文化 [traditional arts] なのである。

あらゆる伝承芸術文化は身体の動きによって表現されるという事実に基づき、「口頭でなされる伝達・伝承行為」の全てを包括する概念として「身体的・口頭的 [corp-oral] 伝承」という用語を提案したいと思う。そしてここには「語りや唄による伝承」も「手話による伝承」も含まれるが、前述した通り、後者が果たしてきた役割はこれまで徹底的に見過ごされてきたのである。

こうした現状を打開するための方策のひとつとして、「獲得さ

れた聾文化 [Deaf Gain] という理論的枠組を提示したい。これは、聾であることを「聴力の喪失」として捉えることへの異議申し立てとして、バウマンとマレイ (Bauman & Murray, 2014) によって案出された概念であるが、この概念を用いることによって、手話という文化が聾者自身のみならず聾者以外の人びとにも恩恵をもたらす資源となりうると共に、手話を用いる聾者社会における価値観が、非聾者社会においても、多様性を認め合い異質な者同士共存していこうとする、「社会的・文化的な繋がり」の思想 [social and cultural ecology] を体現していくことに貢献するものと思われる。さらに、「獲得された聾文化」の研究は、「身体的・口頭的伝承」の芸術文化をより一層多様な豊穡なものとして理解することにもつながると確信される。

四、獲得された聾文化としてのストーリーテリング

英国手話言語 (BSL) によるストーリーテリングについて、三つの事例研究を行なった。そこでのフィールドワークやインタビュー、さらにBSLのパフォーマンクス・テキストの詳細な分析を通して、手話という視覚的・空間的・動的な言語によるストーリーテリングが持つ高い芸術性が確認された。前述した「獲得された聾文化」という概念が、ストーリーテリングの分析において実証されたと言つてよい。

「口承文芸」を単なる「音声言語による伝承」にとどまらず

「身体的・口頭的伝承」による言語文化として広義に捉え直すという発想は、従来の口承文芸研究が「音声偏重」であったことに對する反省を迫るものでもある。つまり、文化の伝達は「身体の技巧的な動き」[techniques of the body] に基づいて行われるという事実を我々は認めなければならない。そしてまた、音声言語によるストーリーテリングも手話言語によるストーリーテリングも、ともに「身体の技巧的な動き」による文化伝達であるという意味において、スコットランドにおける重要な「身体的・口頭的伝承」であることを理解すべきであろう。

五、架け橋としての聾文化

以上のように、手話によるストーリーテリングの分析は、非聾者の世界から切り離された聾者の世界の研究として閉じられたものではなく、音声言語によるストーリーテリングにおける「身体の技巧的な動き」の意味の探究へと開かれていくものである。

さらに、聾文化としての手話によるストーリーテリングは、その内容を通じて、聾者に非聾者の世界を理解させるという機能を果たす。一方、それはまた手話という手段を通じて、非聾者に聾者の世界を理解させるという機能を、可能性として持つ。このような意味において、手話によるストーリーテリングは、聾者の世界と非聾者の世界の架け橋として重要な意義をもつ聾

文化なのであり、今後のさらなる研究が期待される。

〈中略参考文献〉

- ・ Bauman, H. (ed.) (2008) *Open your eyes: Deaf studies talking*. Minneapolis: University of Minnesota Press
- ・ Fjord, L. (1996) 'Images of Difference: Deaf and Hearing in the United States', *Anthropology and Humanism* 21 (1), pp.55-69.
- ・ Leith, E. (2016) "Moving beyond words in Scotland's corp-oral traditions: British Sign Language storytelling meets the 'Deaf Public Voice.'" PhD thesis, University of Edinburgh.
- ・ Mauss, M. (1973) 'Techniques of the body', *Economy and Society, Vol 2 (1)*, pp70-88.
- ・ McFadyen, M. (2012) "'Presencing' Imagined Worlds: Understanding the Maysie, a contemporary ethnomusicological enquiry into the embodied ballad singing experience." PhD thesis, University of Edinburgh.
- ・ McNeill, D. (2000) *Language and gesture*. Cambridge: Cambridge University Press.
- ・ Napier, J. (2002) 'The D/deaf-H/hearing Debate', *Sign Language Studies* 2 (2), pp.141-149
- ・ Pollitt, K. (2014) "Signart: (British) sign language poetry as Gesamtkunstwerk." PhD. thesis, University of Bristol.